

3 集団コミュニケーション療法が小児の言語及び コミュニケーションに及ぼす効果

渡辺紗江子, 青木さつき

明倫短期大学附属歯科診療所ことばクリニック

keywords : 集団コミュニケーション療法, 効果, 頻度, 発達段階

はじめに

附属歯科診療所「ことばクリニック」は、今年9月から、高頻度な訓練の実施、他児との関わりの場の提供、保護者の不安の軽減等を目的として、2～4歳児を対象に集団コミュニケーション療法（以下集団療法）を開始した。そこで今回は、この三ヶ月間を振り返り、集団療法の現状や、その効果等について事例を通して報告する。

事例

事例1：3歳6ヵ月男児（自閉症）

初診は平成19年6月、主訴はことばの遅れであった。初診時には母にしがみつき泣いており、指差しもはっきりせず、また、非常にこだわりが強かった。個別療法により、文レベルでの表出は可能になったが、他者とのやりとり（特に他児との関わり）に困難さがあった。そこで、集団療法の目標として、入園に向け、集団に適應すること（長期）、好きなおもちゃを介して他児と関わりを持つこと（短期）を設定した。3ヵ月間の訓練により、他者への拒否が激減し、自ら働きかける様子も見られようになった（表1）。

表1 訓練経過

	9月	11月
入室時	入室を拒否、泣く	挨拶しながら機嫌よく入室
他児との関わり	無視、近づくと拒否	他児の名前を覚えて呼びかけ、おもちゃの貸し借りも可能に
その他	嫌いな歌は奇声をあげ走り回り拒否	順番を守って座って待つ 好きな歌をリクエストすることも

事例2：3歳4ヵ月男児（自閉症）

初診は平成20年7月、主訴はことばが出ないことであった。初診時には母の後ろに隠れ、指差しも不可、発語はなく、カードは奇声をあげて拒否した。そこで、集団療法の目標として、言葉でのやりとりができること（長期）、指差しができること、沢山声を出すこと（短期）を設定した。

3ヵ月間の訓練により、音真似も増え、自力で言える単語も出てきている（表2）。

表2 訓練経過

	9月	11月
指差し等	不可 カードに興味なし	可 カード・パズルへの取り組み良
他者との関わり	他者への興味少 なく物への関心ばかり	知っているSTを探して自ら近づく 他児の遊びを注意深く見ている
発語	なし 奇声ばかり	「あれ」「なに」等の表出、音真似可

結果および考察

以上二つの事例より、まわりとの関わりの中で、他者への興味関心、遊びの広がりが見られ、集団療法の効果が認められた。

現在、集団療法の対象となる児は10名おり、そのうち集団療法に参加したことのある児は9割に上るが、その参加頻度については個人差が非常に大きく、毎回の参加総数は多くない（図1）。特にダウン症候群の児の継続した参加が見られないという特徴がある。

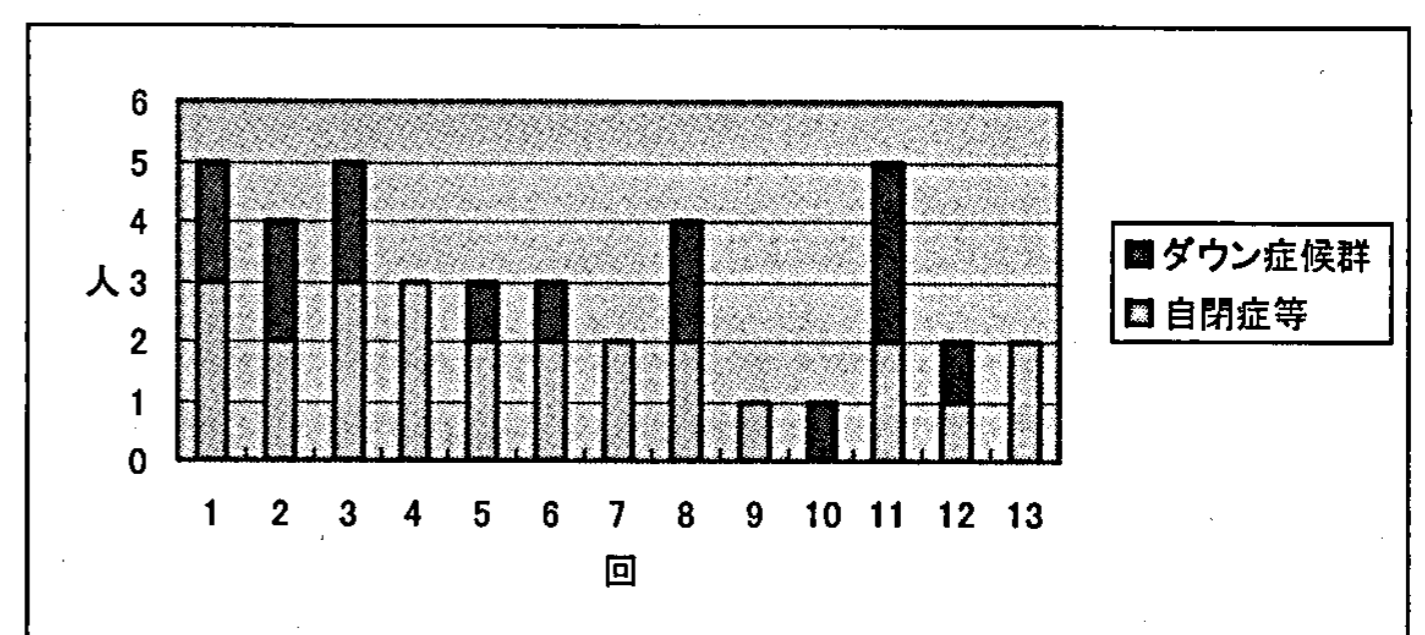


図1 集団療法の参加人数と内訳

参加数が少ない原因としては、参加児の障害種の違いや発達レベルの違いが考えられる。レベルが全く異なる児に圧倒される児がいたり、共通して取り組める課題が少ないという現状の問題がある。今後、その解決策としてより多くの参加児を集め、発達レベルに合わせた集団作り、集団に合わせた訓練計画の立案が必要であり、よりよい集団療法のあり方について検討を重ねていきたい。